戦後日中教育文化交流に関する一考察
―大平学校の日本人講師に焦点を当てて―

孫　　暁英

キーワード：日中教育文化交流、大平学校、日本人講師、日本語教育実践、中国観の再構築

【要　旨】日中国交回復後、日中協力関係の形成に大きな役割を果たした「在中華人民共和国日本語研修センター」（通称・大平学校）が1980年北京語言学院に設立された。

大平学校は、文化大革命直後の1979年12月に大平正芳首相（当時）の訪中をきっかけとして誕生し、ODA援助という形で、中国の大学の現職日本語教師120名に対して１年間の日本語教育に関する集中研修を行い、これを５か年継続することにより計600名の教員の再教育を行うことになった。大平学校には、金田一春彦教授を始め、早稲田大学教授木村宗男、東京外国語大学教授国松昭、国立国語研究所所長林大、日本語教育学会会長小川芳男、大阪大学名誉教授宮地裕、京都大学名誉教授渡辺実などの日本を代表する著名な国語・日本語教育関係の学者（のべ91名）が相次いで赴任し講義を行った。

本稿は日本人講師を中心に論じ、当時の日本人講師がどういった経緯から中国において日本語教育を指導したのか、また彼らにとっての異文化体験の具体的諸相やその意義について分析する。まず、日本人講師が大平学校に至るまでの経歴を明らかにする。次に、大平学校での異文化体験について述べる。教育実践だけではなく、生活体験なども含まれている。最後に、日本人講師にとっての大平学校の意義を検証する。

その結果として、第一、大平学校の講師は「優れた日本語教師」「優れた研究者」「優れた人間」という三つの要素から成り立っていた点である。第二に、大平学校は、金田一春彦など著名な国語学者・日本語教育者が教鞭を執り、中国における日本語教育を推進しただけではなく、日本人教師の指導もして若手日本語教育専門教師の育成にも大きな役割を果たしたと言える。第三は、日本人講師の中国観、世界観がこの大平学校時代を通じて再構築されたことである。

はじめに

1976年に文革が終わり、1978年に改革開放政策が鄧小平によって打ち出された。これより海外に目が向けられるようになり、国際情勢及び国内で大きな変化が起こった。それを象徴する動きが1978年日中平和友好条約の締結である。1972年にすでに日中は国交を回復していたものの、日中間の教育文化交流はそれほど盛んではなかった。しかし同条約の締結によって、日中関係が更に親密になり、経済交流のみならず、人的交流も頻繁に行われるようになった。この中で、中国国内で日本に学ぼうという気運が高まり、中国政府の要請を受けた多くの日本人が現地へ赴いて、技術支援・教育指導などを行った。

最も注目すべき点は、中国が日本の戦後の復興を参考にしたことである。そして改革開放後両国間の交流が盛んとなったが、言語上の壁が大きく横たわっていた。こうした中、1979年に訪中した当時の首相大平正芳は自身の講演の中で、相互理解を深める上で両国の人の交流を盛んにす

ることの重要性について説き、これが両国の人的交流促進の大きな契機となった。その背景には、中国の近代化に不可欠なものとして日本の技術協力が求められていたこと、があった。その土台としての語学は重要であり、教育分野での人的交流の代表的な事例として大平学校を挙げることができる。

大平学校には、対中華人民共和国日本語教育援助特別計画実施委員会の議長（当時）を務めた金田一春彦を始め、木村宗男、国松昭、林大、小川芳男などの有名学者（のべ91名）が赴任し、講義を行った。日本において第一線で活躍していた国語学者・日本語教育者・文学者などが中国で教鞭を執っていたところから、政府が日本語教育への支援を如何に重要視していたかが伺える。しかも、日中教育文化交流の機会が限られていた当時においては、日本人講師にとっても中国人研修生にとっても、大平学校での１年間は濃密な異文化体験の時間であった。

大平学校の最大の特徴は日中政府の協力関係の下で、日本人教師が現地において、中国人教師教育に携わったことである。日本人教師がカリキュラムの設定から講義まで中国政府からすべて委任された。それに対して中国側スタッフは教務補助役となり、日本人講師のサポートを行った。こうしたやり方は当時の文革直後の時期だけではなく、現在においても極めて異例である。これは日本側にとっても貴重な機会となり、日本人講師は外国に滞在しながら、現地の人に母国語を教えるという国内の教育現場では得られない体験をした。

大平学校に関する先行研究として、椎名和男（元国際交流基金日本研究部長・大平学校の創始者の１人）（2007）[1]、沈国威（元北京語言学院講師・大平学校３期生）（2010）[2]『大平学校の前世と今生』（2012）[3]、小熊旭・川島真（2012）[4]、徐一平（2010）[5]、徐一平・曹大峰（2013）[6]、大山正博（2012）[7]、孫暁英（2013）[8]（2014）[9]などが挙げられる。これまでの研究は、大平学校の教育実践について論述し、当時赴任した日本人講師の役割の重要性を証明した。しかし、そもそもなぜ彼らは中国に派遣されたのか、そして海外で献身的に努力したのか、その具体的状況については十分に解明されてはいない。中国と日本の教育システムの違いが立ちはだかる中で、日本人講師が中国で教鞭をとることに葛藤は無かったのだろうか。さらに、1980年代に日本人が中国に渡るという経験で何を得たか、それがその後の彼らの人生をどう左右したかについて多角的な視点から検討を行っていく必要がある。

そこで本稿では、対象を大平学校で教鞭を執った日本人講師に絞り、彼らの中国に対する哲学、大平学校に到るプロセス、大平学校での教育実践の様子・生活体験、当時の中国・中国人への思いなどに迫っていく。当時赴任した講師たちの中にはすでに他界した方もおり、健在であったとしても高齢となっているが、筆者がインタビューした11名の日本人教師（長期７名・短期４名）のライフストーリーを中心に考察していくこととする。また、かつて北京に滞在した日本人講師の妻２名へのインタビューの分析を通じて、生活面及び大平学校の周辺の事情を検証することで、当時の様子を立体的に描き出すことに努めたい。

表１　調査協力者一覧表

番号	性別	年齢	インタビュー時間	調査地	当　時	現　職
T1	男	60代	2012年１月19日	東京	事務・教師	教授
T2	女	60代	2012年６月６日	東京	通訳・教師	教授
T3	男	60代	2013年７月12日	東京	短期講師	教授
T4	男	60代	2013年９月11日	大阪	通訳・教師	助教授
T5	男	70代	2013年12月８日	名古屋	副団長	教授（故）
T6	男	50代	2014年１月15日	奈良	短期講師	教授
T7	女	60代	2014年１月16日	大阪	長期講師	教授（定）
T8	男	50代	2014年３月17日	奈良	通訳・講師	教授
T9	女	80代	2014年６月15日	奈良	短期講師	講師（定）
T10	男	80代	2014年７月３日	東京	短期講師	教授（定）
T11	女	60代	2014年９月28日	筑波	長期講師	教授
K1	女	60代	2013年12月８日	名古屋	副団長奥様	主婦
K2	女	80代	2014年１月15日	大阪	団長奥様	主婦

注：Tは日本人講師を指す。Kは日本人講師の家族を指す。
（定）は定年退職の略です。（故）は現在他界した略です。

調査内容

・大平学校に赴任したきっかけについて
・大平学校でどのように日本語教育実践を進めていたか
・大平学校に赴任した時、どのような生活を送っていたか
・大平学校での１年が自分自身の人生・キャリアにどんな影響を与えたか

このような調査内容によって、大平学校時代が自分の人生に及ぼした影響、また社会的な影響を把握することができると考えた。インタビューの内容は調査協力者の同意を得て、ICレコーダーに録音し、文字起こしを行った。

本稿の構成は、以下のとおりである。まず、大平学校に至るまでの教師の経歴や赴任するきっかけと原因を探る。次に、大平学校での教育実践、異文化体験まで踏み込んで記述する。最後に、総括として日本人講師にとっての大平学校時代の教育的意義を考察していく。

１．大平学校に赴任した日本人講師

国際交流基金の資料によれば、世界各国における日本語講師・専門家の派遣については、以下の通りである。1983年度に全体で37の国・地域に229人が派遣されており、その半数近くが中国である[10]。彼らは中国における日本語教育の発展に大きな役割を果たした。大平学校に赴任した日本人講師は長期滞在と短期滞在を合わせて５年間で合計91名[11]であった。

講師団の構成について、まず、長期派遣の講師として、団長１名、副団長１名、通訳兼講師１名、事務兼講師６～７名となっている。団長以外は、中国語が出来る20代から30代の若手講師が多く、大平学校の教務運営、中国側との交渉及び講義を担当した。その他、長期派遣とは別に短期派遣の講師として、年間10名～20名がいて、赴任期間内の講義を担当していた。

T2は長期の講師の役割分担について、「その中の４、５人が教務の仕事とか、総務の仕事とか、

図書室の管理とか、役割分担した。授業の時間割は私たちだけでなく、例えば 1 か月とか 3 か月とか、短期派遣の先生たちの時間割を組む仕事、短期の先生の生活面のお手伝いをした」と、語った。日本から来た教師の買い物の手伝いや、病気になった際の病院への付き添い、また彼らの旅行に同行するなど、実生活面でのサポートも行った。

では、これらの日本人講師はどういった経緯で大平学校に赴任したのか、そのきっかけについて、考察していく。

(1) 留学できなかった中国語専攻者

大平学校に赴任した長期講師陣の中で、大阪外国語大学（当時、以下大阪外大と略称）[12]の関係者が多いことは、一つの特徴として指摘できる。大平学校の団長佐治圭三はかつて大阪外大で教鞭を執っており、副団長の平井勝利夫妻、水野義道夫妻、砂川有里子、中川正之、大西智之、澤田啓二などは、大阪外大の中国語学部や大学院の出身者であった。

大阪外国語大学で中国語が専攻だったT7 は「私の学生時代は中国に行くことが出来なかった。当時中国とは国交もないし、行けたとしても台湾とか、香港とかだった。そこには私は行くつもりも全然無かったし、とにかく中国語をもっと勉強したいし、中国のことをもっと知りたい、中国に行きたいという気持ちがすごく強かったから希望した。このチャンスを逃したら、もう無いと思った。幸い宮地裕先生[13]からお話を進めてくれ、代わりが必要ということで私が行くことになった」と、赴任の経緯を述べた。佐治はかつて大阪外大の先生で、佐治先生の授業を受けたこともあるので、自分のことを知っていた。T7 は長期滞在者として、短期の先生方のお世話をするために採用となった。

K1 は夫のT5 の赴任の理由について、「大阪外大時代の恩師の伊地知善治[14]先生からだった。そして、家族で行きなさいと。私も大阪外大で中国語を学んでいたからかもしれない。団長は大阪の佐治先生で、私達も大阪にいたし、大阪の大学の出身だったからかもしれない」と、大阪外大の繋がりで関係者に呼びかけていたことについて語った。

T8 も大阪外大の大学院時代に指導教官の大河内教授[15]から声をかけられて、初めて大平学校に行った。T8 によれば「なかなか中国へ簡単に行くような時期ではなかったので、1983年に初めて中国に行った。声をかけてもらった時には、二つ返事で行きますと答えた。休学して行かせてもらった」と話した。

大阪外大は創立当初から「国際的実務者の養成を学則で打ち出し、募集要項の配列順では東洋語部を先に配してアジア重視の姿勢」[16]を示していた。中国語学科を始め、大阪大学に統合された現在も日本における中国語教育の中心の一つである。同大学は中国における日本語教育の普及活動に大きな役割を果たしたことが分かった。

以上のように、文革中は中国に行くことができなかったため、日本の中国語学科の出身者たちにとって、大平学校への赴任は待望の機会であったと言える。

(2) 社会主義理想に共感した中国研究者

中国語専攻の教師以外に、中国の歴史や文学、文化などについて研究している者も、大平学校

に赴任した教師の中にいた。

中国近代史を研究しているT2 は、中国語の辞書を書いていた有名な藤堂明保[17]に中国語を教わった。T2 は「中国の方に多大なダメージを与えた10年（文化大革命：筆者注）だけれども、そのころ世界的学生運動[18]が盛んになった時代で、学問の世界に閉じこまらずに、社会との接点というような理想に共感した。例えば、テレビで子どもたちや若い人がインタビューを受けると、照れもせずに「為人民服務」（人民のために奉仕する）と言っていた。私自身、自分のために生きているが、人々のために素直に思えるような社会はどんな社会だろうか、すごく感銘を受けた」と語った。

また、T1 は自分のことを「毛派」（毛沢東派）と自称している。大学時代に学生運動に積極的に参加していたT5 は、中国に行けることについて、「夢の世界だった。いや、本当、興奮した」と、その喜びについて語った。

このように彼らは、はじめに中国に対する興味を持ち、大平学校に赴任し、その後日本語教育者に転身していった。その特徴の一つとして、社会主義に対して、一種の憧れを持っていたことが彼らの語りから伺える。

(3) 国際交流基金からの依頼で赴任した国語国文学・日本語教育の専門家

次は、大平学校の第１期短期派遣講師名簿を取り上げて、短期派遣講師の所属機関や専門分野についての詳細を見ていこう。

表２　大平学校第１期短期派遣講師名簿（18名）

氏　　名	派遣時所属機関	専　門　分　野
金田一春彦	上智大学教授	言語学者、国語学者、国語辞典などの編纂
木村宗男	早稲田大学教授	日本語教授法
国松　昭	東京外国語大学教授	日本文学
山田敬三	神戸大学助教授	中国文学研究者
浅見　徹	岐阜大学教授	国語学者
浅野百合子	慶應義塾大学国際センター講師	ことばの意味
武部良明	早稲田大学教授	国語学者、文字の表記
吉沢典男	東京外国語大学教授	外来語
林　　大	国立国語研究所所長	国語学者
小川芳男	日本語教育学会会長	1977年３月～1985年５月日本語教育学会会長
長　幸男	東京外国語大学教授	日本経済史
武田清子	国際基督教大学教授	思想史学者
宮地　裕	大阪大学教授	国語学者（現代語の文法と表現の研究）
野元菊雄	国立国語研究所日本語教育センター長	言語学者
村木新次郎	国立国語研究所研究員	日本語学（語彙、文法）
吉田熙生	東京女子大学教授	小林秀雄、中原中也などの研究第一人者
阪倉篤義	京都大学名誉教授	国文学者、国語学者
阪田雪子	東京外国語大学教授	文法、教授法、読解

出典：国際交流基金日本語課「在中国日本語研修センター第１～５年次報告（要旨）」、国際交流基金、1985年。

表2のように、著名な国語学者、国文学者が第1期の講師として派遣された。日本語教育が展開し始めた時、国語学者と国文学者が中心に携わっていたことが伺える。また、大学の教授以外に、日本語教育学会や国立国語研究所のような組織と研究機関も積極的に関わっていた。例えば、当時大平学校に赴任した講師として、第1期は国立国語研究所所長林大（日本語教育学会会長1985年6月～1995年5月）、国立国語研究所日本語教育センター長野元菊雄（日本語教育学会会長1995年6月～1997年5月）、国立国語研究所研究員村木新次郎3人が赴任している。また、第2期には国立国語研究所日本語教育センター第2研究室長上野田鶴子、第4期は国立国語研究所研究室長宮島達夫などが挙げられる。また、大平学校のその後、短期派遣講師の水谷修（日本語教育学会会長1997年6月～2001年5月）は国立国語研究所の所長になり、長期派遣講師の水野義道は研究員になるなど、大平学校関係者が歴任した。

国語学者はどのように大平学校に赴任に至ったかについて、以下のインタビューから国際交流基金が手配していたことなどが分かる。

T6は「私は当時、国際交流基金から家に連絡が来た。大平学校に半年ほど行ってもらえませんかという電話をもらい、びっくりした。私でいいですか、と。中国語も知らない。日本語教育をやったこともない。後で渡辺実[19]先生の推薦だったことがわかって驚いた。その時大学に勤めていたが、大学は国立大学で、研究や教育のためなら、どうぞ行って下さいという感じで、帰ってきて報告すればよかった。私は初めて、中国に行った」と、赴任のきっかけについて話した。

T3は夫婦とも日本語教育に携わっていた。先に妻が1980年から1981年の間、吉林師範大学（今の東北師範大学）に赴日留学生予備学校の日本語教師として行き、長春に1年住んでいた。ちょうど結婚直後に妻が行ったため、T3は3回ほど会いに行ったという。赴任のきっかけについて、T3は「きっかけはやはり国際交流基金に頼まれた。私の前にどんな人が行ったとか、私と一緒にどんな人が来るとかというような話を聞いて、それは大変面白いと思った。強く興味を惹かれたので、はいと決めた」と述べた。

このように、大平学校は中国における日本語教育のエリートを育成の基礎を築くため、より能力が高い人材が現地へ派遣されたことが伺える。短期の講師の中には、国語学・日本語教育の専門領域が多かったことが分かる。短期の国語・日本語教育の専門家の赴任のきっかけとなったのは、国際交流基金による派遣依頼であったが、無論、関係者の推薦も一部占めている。

(4) 自分や親が戦争体験者の事例

日本人教師のうち、戦前植民地で日本語教育に従事した人もいる。例えば、木村宗男は1943年9月から1946年12月までフィリピンに赴任し、マニラ市役所・比国文部省で日本語教育を従事していた[20]。若手教師の中には、戦前・戦時中に両親が中国と関わりを持っていた事例がある。例えばT5とT7の父親が戦時中実際に中国に行っていた。また、T5は戦後華僑にお世話になった。K2は子ども時代に当時植民地であった台湾で過ごし、敗戦後引き揚げたなど、中国との間接的な繋がりを持つ日本人教師が多かった。さらに、T1の両親は戦前中国の天津に住んでいた。そこで出会い、結婚し、長年中国で生活していた。敗戦後、1946年妊娠中の母親が引き揚げ日本に戻った。そのためT1は親の影響を受けて自分のルーツを強く意識している。中国語も堪能で、

現在も日中の歴史研究を行っている。

T5 の妻K1 は「主人の父親が戦争の時、中国に行っていた。ひどいことはしてないと思うが、やはり中国に行ったということで少しでも中国の方に何かお役に立つことができたらいい。主人が名古屋大学に来てからは、できることをやった。その頃から段々交流も盛んになってきた。いろいろな世話をし、中国語教室も始め、今も続いている。日本に来られた中国人の方を非常勤教師や大学に紹介してきた。初めはこの教室で、その後は大学の方にも紹介をした」と語った。

このように、長期の講師は中国語の出身者や中国研究の学者であるか、家族の中に中国に縁がある者が多い。彼らは自身の念願である中国行きという夢を叶えるために大平学校に行くことを望んだ。植民地支配と戦争を反省し、歴史に翻弄された人々の夢と挫折の跡は、その次世代へも確実に影響を与えたことであろう。

２．日本人講師の教育実践

(1) 授業

中国の日本語教育の進展に伴い、研修生の教育水準を把握した日本人講師は、当時最新であった教育理念及び教授法を導入し、講師各自が工夫を加え、教育現場で実践することになった。以下にその実践例を見ていく。

T7 は、初級の日本語教授法を教えていた。「学生たちは、（大平学校入学以前に）十分に日本語教育を受ける時間がなかったにも関わらず、教師として日本語を教えなければならない人たちが多く、悩んでいた。そういう意味ではすごくやりがいがあったし、彼らもよくついてきて、いい教育ができた」と語った。

上級クラスを担当したT6 は、国際交流基金で文法のうち助詞と助動詞の授業を次のように依頼された。「助詞に関する教科書を最初から最後まで、１冊を通してやること」と、「それぞれの先生が大学に戻ったら、この本を使って授業ができるようにすること」であった。そこで、T6 はプリントを作成し、研修生たちがこのプリントをコピーしてそのまま現場で使えるように準備した。

もう一つの担当授業は精読であった。T6 は「（出国前に）向こうはどれぐらい準備できているか分からなくて不安だった」と困惑していたが、高等学校用現代文の教科書と高等学校の教師用指導書、それを持って行った。その中で、現代文を読みながら、試験問題を作った。「その教科書は、結果的にはちょうどよかった。そして、たくさんのプリントを配った。そのプリントをそれぞれの研修生が大学に持ち帰って使えるようにした」と語った。

このように、当時は日本語教育関係の教科書がまだ不足していたため、国語国文学出身の日本人講師は、高校用の国語現代文の教科書と指導書を日本語教育の領域に取り入れようと、積極的に取り組んでいた。このことから、早期の日本語教育は国語教育に大きく影響されていたことが分かる。

(2) 教師の葛藤

日本人教師たちが懸命に尽力した一方で、現地中国人研修生が必要としていたことと日本人講

師が提供したものとが、必ずしも一致していたわけではなかった。むしろ双方の食い違いや日中の考えの相異のために日本人講師が葛藤していた様子が、インタビューからうかがえた。

T7 は「私が日本語教育を始めたのは1970年代で、オーディオリンガルメソッド[21]が一番華やかな時代だった。それで職場に入ってすぐに、先輩に付きっきりでオーディオリンガルメソッドのやり方や教案作りを教わった。いわゆる文法訳読法じゃなくて、オーディオリンガルメソッドで短時間に濃い授業をすれば効果があることを日本で実践してきたタイプだったので、何とかそのやり方、オーディオリンガルメソッドの教授法でやったが、ほとんど受け入れられなかった。教え方に興味を持つことはその当時の中国にはまだなかった。とにかく、日本語が上手になれば教えられるっていう考え方でした」と語った。

研修生たちは教授法の先入観を変えることに強い抵抗を示しただけでなく、そうした先入観のせいで新しい理論を先入観で解釈してしまうこともしばしばあった。

T7 は「印象に残って今でも忘れられない言葉がある。初級のクラスの学生が『先生、私たちの大学でこんなふうに習っています。教師は大きなバケツの持ち主です。学生は空っぽのコップです。教師はその学生のコップをいっぱいにしないといけないのです。だから知識はいくらあっても足りないのです』。そんなふうに言われた。その時の学生のイメージは、先生は100％学生のために全部注いでないといけない。そういう考えだから、学生は待っているだけでいい。当時の中国には、学生の能動的な態度を刺激する教授法はまだ時期が早すぎた。その後私は日本へ帰って、たまたま培訓班の人たち（研修生たち）に同窓会で会った。その時もまだ『（先生が紹介してくださった）教授法はやっていません、とにかく学生に教える知識が欲しいです。教授法を教えている余裕はありません』って言われた。中国における日本語教育を考える時に、文法とか、作文、語彙以外に、確立された日本語の教授法を授けるという、みんなはよくその方面を考えていると思うが、その辺はなかなか育てにくい」と話した。

また、T4 は「佐治先生はどう感じていたか知らないが、始めの頃、こっちの考えていることと中国で出来上がっているシステムが合わず、両者の間で齟齬がうまれていた」と語った。

在中国日本語研修センター第２年次報告（要旨）によると、「研修センターでは実践能力の向上と研究能力の養成を大きな柱としている。しかし、研修生の大半は『現場に即役立つ』知識の教授を求めており、『研究能力養成』を旨とした科目について、研修生はあまり積極的ではなかった。研修生側の実践能力向上志向と日本人講師のギャップをどのように埋めていくかは、今後の大きな課題であろう」と述べている[22]。大平学校で学んだ600名の中国人研修生たちは、選抜試験を経て採用された優れた人材であった。しかし、彼らは一部のベテラン教師を除いて、概して教師としての現場経験が乏しく、日本語教育を担当することに強い不安を抱えていた。

研修生の勉強に対する熱心さに驚き、感心すると共に、当初日本の講師陣を困惑させたのは彼らの研究的態度の希薄さであった。水野によると、「まず、何事についても白か黒かという出来合いの回答を求めてきた。研修生の多くは学生時代に直接に文革の影響を受けて十分に勉強できず、レポートも初めて書いたという人が多かった」[23]という。

また、長い間国外に対して閉ざされていたという社会背景と、多くの日本語教師が英語を学習する機会に恵まれなかったという事情から「（学生たちの）外来語の語彙は極めて乏しく、外来

語を使う場合にはいちいち意味を説明しなければならなかった」[24]。当時の中国では言葉の問題というと、まず実際に役立つことを考えろと言われていた。つまり、言語教育に即効性が強く求められていたのだ。

このように、即効性を求める研修生と教師の間にズレが生じたことに加え、文革の残した中国の「閉鎖的」な体制も、言語教育に支障を与えていた。また、一方的な詰め込み教育の観念が、まだ根強く研修生たちを縛り付けていたことが分かる。

３．派遣日本人講師の生活状況

(1)「専家」という身分

1980年の中国は、中国の建設のためにやってきた在華外国人専門家を尊敬し、大切にしていた。

T7 は「日本という社会からも離れ、中国では特別扱いなので、何でもできる生活をしたのは生まれて初めてのことだった」と語った。続けて、「私たちは専門家という身分で、自由に買い物もでき、人民元も兌換券[25]も両方使える身分だった。ところが、同じホテルに住んでいるいわゆるビジネスマンは、兌換券しか使えない。だから単価が安い、小さい店では買い物ができない。そういう身分差、区別があった。専門家は中国でいいことをしに来たから優遇する。でもビジネスマンは中国を搾取しに来ているから、彼らからはお金を取ればいい、そういう考え方であった。同じホテルの中で違う建物の中にそういう方たちも住んでいて、交流もあったが、結構ぶつぶつ文句を言っていた。不自由だと。でもたくさん給料をもらっていたし、生活は困ることは無かった。同じ日本人でも違う立場で住んでいるということを初めて経験して、複雑な気持ちにはなった」と回想した。

T6 は「日本外務省はofficialで我々を出している。だから、渡航目的は限定してある。By order of government、つまり政府命令と、渡航先はPeople's Republic of China onlyということで、ここにしか行きませんということで」と話した。

T8 は「もちろん当時だって、各学校との契約で、個人的に中国へ行っておられる先生もいた。プロジェクトはやっぱり国家間の教育のことで、特別扱いだった」と語った。





写真１と２：当時専門家たちの「工作証」（教員カード）のカバーと内容。第３期生を教えていた加藤久雄（現在奈良教育大学副学長）により提供。

彼らが当時を懐かしく語るのは、この、国家間交流の一環として、正式に日本の代表として現地に赴いた影響が大きいと考えられる。日中経済の大きな差があったものの、中国社会において、日本人講師は手厚く非常に優遇されていた。彼らは日本政府の派遣団として、中国では「専家（専門家）」[26]と呼ばれ、専門家として特別の身分の扱いであった。

(2) 北京での暮らし

派遣された日本人講師は、北京市北西部にある友誼賓館に滞在していた。北京語言学院からはマイクロバスで通勤していた。当時、日中の差が大きい中、日本人講師は中国でどんな生活を送っていたか検討していく。

K2 は「北京にいる間、朝、昼、晩の３食は、自分で作っていた。中国の料理も美味しいが、３か月ぐらい食べ続けると飽きる。主人は時々日本人の同僚と中国人研修生たちを家に招待して、日本料理をご馳走した。昼間の私は買い物で走り回っていた。当時、友誼商店によく行った。語言学院は、友誼商店行きの買い物専用のバスも提供してくれた」と語った。

日本の食材については、K2 は「娘が日本から味噌、醤油、お酢などの調味料や、うどん、そうめん、インスタントラーメンなどの食材を月に１回ぐらい送ってきた。80～83年の中国では日本の物があまりなく、４年目から外国の商品や日本の商品がすこし買えるようになった」と話した。

インタビューから、日本の給与とは別に中国からも給料が支給されていたようである。当時中国人の平均給料は１か月約30元～50元である。そのため中国政府は中国人の10倍～20倍の手当を支給していた。このように、日本から派遣された日本語教師たちは経済的には普通の中国人と比べて、比較的裕福で余裕のある生活を送ることが可能であったであろうということが、調査から推測できる。

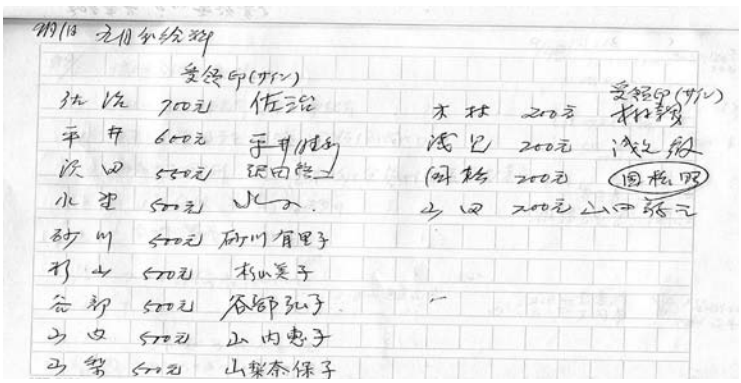


写真３：当時の給料受領のサインの資料、平井勝利より提供。

この給料は当時の中国政府が専門家に支給した中国側の俸給である。国際交流基金は日本側の俸給を別途支給した。

また、当時、中国では人民服姿の人が多く、人々はほとんど同じ格好をしていた。質素な生活

条件の中で生活するにあたり、佐治先生を始め、竹中先生などは人民服と布靴を購入し、現地の生活に合わせていた。

K2 によると、「当時、人民服、人民帽、布靴、黒いカバーを着て、みんな地味な格好だった。中国に行ったら、主人もすぐに人民服、人民帽、布靴などを町で買い揃えてそれを着替えて、中国の生活に合わせた。生活、習慣が違うけれど、珍しくて、楽しみにしていた。他の先生も人民服で、もちろん全員じゃなく、きちんとした背広の先生も、人民服の先生も、両方いた。３年目（1982年）からスカートやスーツなども見られるようになった」。





写真４と５：当時赴任した時、北京で着ていた「人民服」（中山服）及び北京語言学院のバッジ、第３期生を教えていた加藤久雄（現在奈良教育大学副学長）の提供。

T6 は「竹中先生はずっと人民服の恰好だった。仕事は背広ではできないので、私は中山服を買った。（中山服に付けてある北京語言学院のバッジを見せ）、これが白だと、北京語言学院のスタッフ。白地に赤だと、学生。だから、旅行でもこういう恰好だった」と語った。

日本人専門家は当時の中国人の生活様式と違い、中国での仕事以外に主に旅行やレジャーなどを楽しんでいた。中国側も彼らのニーズに応え、できる範囲で手配していた。佐治圭三、妻及び娘が８月４日～８月18日家族で中国国内を回った記録が残っている。昆明、桂林、杭州、無錫、上海等を観光目的で訪問した。

K2 は「当時の中国ですから、よかった。語言学院の諸先生、孫先生、周先生にお世話になった。招待をしてくれて、チベット、安徽省以外は全部行った。半分は中国政府の招待で、半分は私費だった。大平学校の研修生は全国から集まってきたので、どこへ行っても、研修生がいる。いつも『来てください』と歓迎されて、案内してくれた」と、研修生たちの熱意を話した。

T7 は「小旅行で地方に行ったとき、私たちが何かを見ていると、周りの人たちがすぐに囲んで、『あ、中国語しゃべった』とか。すごく人が集まってきて、そんな時代だった」と、当時外国人がまだ少ない状況を語った。

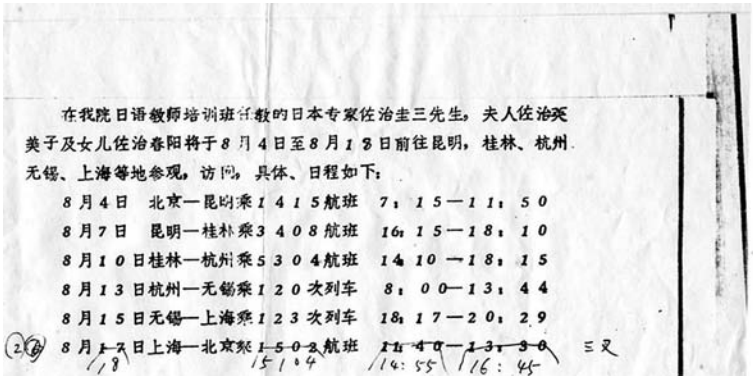

在我院日语教师培训班任教的日本专家佐治圭三先生，夫人佐治英
美子及女儿佐治春阳将于8月4日至8月18日前往昆明，桂林、杭州
无锡、上海等地参观，访问，具体、日程如下：
8月4日 北京—昆明乘1415航班 7：15—11：50
8月7日 昆明—桂林乘3408航班 16：15—18：10
8月10日桂林—杭州乘5304航班 14 10 —18：15
8月13日杭州—无锡乘120次列车 8：00—13：44
8月15日无锡—上海乘123次列车 18：17—20：29
8月[illegible]日上海—北京乘1502航班 14：40—16：30 三又

写真６：佐治圭三、妻及び娘の旅行のスケジュール、平井勝利より提供。

T6 は「学期の終了を楽しみにしていた。というのは、その時代、中国に行ったり来たりできない。メーデーの休みとか、みんな旅行に行く。私は途中、太原に行った。最後に帰国するまで10日間、私はウルムチに飛行機で飛んで、ウルムチから汽車で敦煌の柳園まで来て、敦煌からまた飛行機で蘭州まで来て、寄り道して帰ってきた。（中略）行けるところまであっちこっち、どこでも行きたい。西安まで行ってみたい、奥まで入ってみようと。ウルムチは公安の許可がないと入れず、みんながバラバラに行くと困るので、２グループぐらいに分かれた。南に行くグループと西の方に行くグループ、私は西の方へ行った」と旅行の話をした。

このように、日本人講師は異国の地で滞在していたため、学校の外の世界、すなわちそこで生活している人々からも学んでいた。先に挙げたように、彼らは旅行を通し、その土地の人の生きる風土・自然を知ることができた。中国の地で日本語教育実践に携わることによって、実際に中国人日本語教師と直接接触する機会だけではなく、現地の市民レベルでの交流を通して中国・中国人を理解することができた。

４．大平学校の教育的意義

(1) 実践と成長の場

大平学校は、日本人講師に海外で日本語を教える実践の場を提供した。研修生は当時の時代背景の中でさまざまな経験や体験のもと、日本語を学んできた。彼らは中国全土の多くの日本語教師の中から選ばれた、いわば精鋭集団であった。地方で日本語教育に携わった人やロシア語から日本語へと移行した人、理工系の大学で科学技術分野の日本語を教えていた人など、その経歴は様々であった。そのため、開校当初の彼らの日本語のレベルは一様ではなかった。中国側の位置づけとしては、大平学校での取り組みを国策とし、研修の枠を特別に与えた。

大平学校は、研修生だけではなく、教える側の日本人教師にとっても大きな成長の場となった。特に当時20代、30代の若い教師にとっては、ベテラン教師たちから様々な指導や教授法などを学ぶことのできる、貴重な機会であった。ベテラン教員の事前の授業準備における時間の掛け方、内容の緻密さ、研修生に何を教えるかを一貫して追求すること、教えた後の反省、受ける側研修生の反応などの授業に臨むためのきめ細かな配慮については大いに学ぶものがあった。

T4 は「まだ20代後半で、すごく中国語の勉強も出来たし、佐治先生からもいろいろと指導していただき、いろんな日本人の先生たちと接する機会があった」と語り、また、「先生の間でも、東京外大の国松先生は人柄が良くて人気があった。それから、NHKのアナウンサーの竹内先生。竹内先生は長年アナウンサーをされていたが、録音をお願いした時全部印をつけて読み上げていく。金田一先生もご自分の講義の前に資料室で準備されていた。アナウンサーもベテランの先生もそこまで準備するのだということを、若い時に近くで見て衝撃を受けました」と述べた。

T2 は「実は、私たちも初めての経験で、教師に教えるわけである。いろんな雑用をこなすとはいえ、授業を持って、教壇に立って、やらなきゃいけない。私たち若い教師も日本のベテランの先生から教えてもらったり、研修会に参加した。学校から帰って、他の先生からいろんなことを教えてもらった。大平学校が開校して、何週間か経ってから、佐治先生や中国側の主任、それから研修生の代表が集まって、何か意見交換会みたいなことをした。その中の一人の方は『私たちには時間がないです』というふうに泣きながら訴えた。もっとちゃんと教えてほしいと。この方は40代の方で、これまで勉強したくてもできなかったので、こういうチャンスを十分に利用したいと学習意欲を見せた。佐治先生も熱くなって、そのため、私たち若い人が「しっかりやれ」と叱られた。それで１年経った頃、ある先生がお帰りになる時に、私たち若手にこう言われた。『若い日本人の先生たちも成長した』と。最初の１年は大変だった。授業をどう教えたらいいか、どう答えたらいいか、必死だった」と語った。このように、教師が連携し、教師同士の研修もあり、相互の役割を重ねる形での協働が、この事例における注目すべき点である。

T8 は、当時日本から来ていた日本人教師が気さくだったと語る。「例えば日本語教育の水谷修先生とか、金田一春彦先生とか、３か月サイクルでいらした。その方々とお会いしたら、気さくで、そこの研修生とも本当に一対一で丁寧に指導をなさっていた。あのプロジェクトが成功したのは、（講師が）偉いということで変に身構えて授業をするのではなくて、先生方の親しみやすい人柄もあったのではないだろうか。本当に丁寧に指導をなさったという印象である」。

このように、若い日本人教師たちは学問に対する態度、生き方などをベテラン教師から学んだ。一流の研究者と非常に近い距離でふれあい、他の日本人教師と直接交流することもできた。そのため、大平学校は、金田一春彦などが教鞭を執り、中国における日本語教育を推進しただけではなく、日本人教師の指導もして若手日本語教育専門教師の育成にも大きな役割を果たしたと言える。

(2) 中国観の再構築

当時の中国政府は日本の学者たちが教える内容教材について、すべてを把握していたわけではなかった。他方大平学校の設立には、正しい日本語を理解し、中国に広め、言語を通して、相互理解を行うという大きな目標があった。

T2 も「中国側が、大変サポートしてくれた。その一方で、私たちのやる授業内容に関しては、ほとんどクレームが付いたことがない。あの頃の中国だったので、すごいと思う。例えば、読解教材はどんなものを使うか。私たちも政治のことを考えたが、こういうものはだめとか、一切無かった」と話した。

T4は「今でも研修生との付き合いが続いている。その付き合いは自分自身の中国を見る目の一つの窓口となっている。その窓口を通した中国との接触は今も全然変わらないので、たとえ尖閣問題でいろんな話になったとしても、自分の考えは変わらない。そういう見方ができるのが、大きい」と熱く語った。

さらに、T8は「私の中では、今でも中国のことを言うと、1983～1985年のことである。それから変わってない。若い大学院生で、非常に大きな刺激を受けた時期であり、私にとって2年半の中国滞在だったが、中国が非常にいい時期だったという気がする。みんな一生懸命勉強するし、純朴だった。だから、非常に印象が深い」と、当時の印象を話した。

このように、日本人教師たちは帰国後も、個々人のつながりを通して中国を見ることができた。このことにより、メディアなどに左右されない独自の中国観が各講師の中に構成されていったと言える。

(3) 国際感覚を培える

60年代の「高度成長期」から、70年代の「経済大国化」と80年代の「国際国家化」[27]を背景として、日本語普及に当たり日本人講師も積極的になっていった。大平学校での体験を通して文化や価値観、考え方の違いを理解し、相手国の良さを認めると共に自国の良さを再認識することができるようになった。その結果中国に対して多面的、多角的な物の見方や考え方ができるようになり、相手に自分の考えや気持ちを伝えるコミュニケーションの方法を知ることで、広い視野で物事を見つめることができるようになった。色々な情報、メディアなどに左右されない、自分で真実を見極めようとする力を、教員たちは大平学校での経験を通して身に着けたのである。

T6は「中国で3か月暮らしてみて異文化理解、異文化交流を肌で勉強するフィールドだった。異文化交流の原則はどちらかが正しいと思ったらだめ、だからどっちも正しい。どっちがいい、どっちが悪いと比べたら、そこに不幸が始まる。簡単に、中国に対する理解が深まったとか、深まらないとか言えない。それを越えて、私は『行ってそこで学ばない場合は意見を言わない』、もう一つは歴史をもっともっと勉強しないとだめ」と語った。

T6はその後、ユニセフでも活躍し、中国以外の国々でも交流をし、大平学校は異文化理解の原点であると主張した。

T8は「相手が自分を対等で扱ってくれるかどうかということである。言葉の上手さだけじゃなくて、ものの考え方として、対等に扱ってくれるかどうかということだと思う。また、相手の気持ちを本当に理解できるかどうか。そういうふうになれたらいい」と話した。

このように、民族、国家が違っても、人間の普遍性においては共通している。体制や価値観の違いを越え、人間を深層的に見ることによって、お互いに人間として尊敬し理解し合える。大平学校の場で人と人が繋がり、異質な文化に対する寛容な態度を養い、国境を越えて、国際協働が可能になった。大平学校に赴任する経験はかけがえのない経験になった。

おわりに

本稿では、戦後日中教育文化交流をテーマに、大平学校の日本人講師に焦点を当てて、彼らの

教育実践及び生活状況について検討してきた。その結果をまとめ、知見を整理しよう。

第一に、大平学校の教師は「優れた日本語教師」「優れた研究者」「優れた人間」という三つの要素から成り立っていた点である。前述のインタビューから明らかになったように、大平学校での取り組みを通して、彼らの専門である日本語教育の内容・方法を、中国において実地検証することができたといえる。それは彼らのその後の教員、教育者としての方向性を定め、人生を通しての大きな成果となった。大平学校の教授陣を招聘した際には、日本の優秀なる人材の派遣を受け、学問だけではなく人格者を迎え入れたいという中国政府の意向があったと推測できる。日本側も、日本語に関して著名な一流の研究者を送った。そのため、信頼と協働のもとに大平学校を運営することができた。

二点目は、若い日本人教師たちは学問に対する態度、生き方などをベテラン教師から学んだ。一流の研究者と非常に近い距離でふれあい、他の日本人教師と直接交流することもできた。そのため、大平学校は、中国における日本語教育を推進しただけではなく、日本人教師の指導もして若手日本語教育専門教師の育成にも大きな役割を果たしたと言える。

第三は、日本人講師の中国観、世界観がこの大平学校時代を通じて再構築されたことである。インタビューに応じた大部分の人は、実際の中国や中国人に好意を寄せていたことが分かる。彼らは日本への帰国後、日中友好活動を支えるアクターとして、主に大学の教育現場で活躍した。大平学校での異文化間教育の体験は、日本の国際理解、日本の各大学の国際化に大きな役割を果たしたと言えよう。

さらに、大平学校が成功した要因として、1972年の国交回復や1978年の日中平和友好条約の締結といった時代の流れの中で、双方のニーズに合致した教育政策であったことが背景にあるのではないだろうか。大平学校における両国の取り組みは、異文化間における教師教育の形を新たに作り上げ、国籍や文化・民族にこだわりなく、人間として平等で公平な教育の場を作り上げていった。

大平学校は日中間の異なる文化の中で教師教育活動を展開し、異文化交流を通して、人間的な相互理解を促進した。そして相互作用の中で生じた価値の葛藤から、文化の融合へと向かい、新しい価値創造へと発展していったのである。

本稿では、多様な赴任動機を持った大平学校の日本人講師を対象としつつも、教師の語りに注目したため、実際に研修を受けた中国人日本語教師たちの反応については十分に言及できなかった。研修生によって大平学校の日本人講師に対する考えに違いは出るのか、という点に関しては、稿を改めて検討したい。

注

1　椎名和男「忘れ得ぬ先達の想い出と若き人々への期待」『日本語教育』(135)、2007年、35～40頁。
2　沈国威「日本研究専家学者的揺籃：“大平班”（日本研究専門家の揺籃：『大平学校』）」『大潮涌動：改革開放与留学日本』社会科学文献出版社、2010年、79～87頁。
3　『蔚藍』専門誌特集号『大平班及北京日本学研究中心知名校友訪談集―大平班的前世与今生（大平学校及び北京日本学研究センター著名校友インタビュー―大平学校の前世と今生）』、2012年。

4　小熊旭・川島真「『大平学校』とは何か（1980年）―日中知的交流事業の紆余曲折」園田茂人編『日中関係史1972-2012　Ⅲ社会・文化』東京大学出版会、2012年、53～80頁。
5　徐一平「大平正芳と中国の日本語教育」『大平正芳からいま学ぶこと―大平正芳生誕100周年記念―』桜美林大学北東アジア総合研究所、2010年、38～53頁。
6　徐一平・曹大峰編集『中日教育合作実践与成効研究―以「大平班」和北京日本学研究中心為例（中日教育協力の実践と効果に関する研究―大平学校と北京日本学研究センターを例に）』学苑出版社、2013年。
7　大山正博『大平学校にみる日中国際文化交流の意義と実践』神戸大学修士学位申請論文、2009年。
8　孫暁英「大平学校における教師教育の研究―異文化間教育の観点から―」『早稲田教育評論』早稲田教育評論　28(1)、早稲田大学教育総合研究所、2014年、147～160頁。
9　孫暁英「日中国交正常化以降の中国における日本語教育と日中交流―大平学校（1980年～1985年）に焦点を当てて―」『アジア教育』第7巻、アジア教育学会、2013年、35～47頁。
10　総合研究開発機構『日本語教育及び日本語普及活動の現状と課題』、1985年、15頁。
11　佐治圭三「中国研修生の燃えるまなざし―第一次対中国特別事業」『国際交流』44号、1987年、45～47頁。その他にも北京の大学に客員教授として滞在の学者、諸事情で北京に行った教師にも講義してもらい、合計約100名の教師が大平学校の教壇に立った。
12　1921年に大阪の実業家・林蝶子女史（1873－1945）が「大阪に国際人を育てる学校を」という理念のもとに、学校設置資金として私財100万円を国家に寄付し大阪外国語学校が設立された。1949年大阪外国語大学が設置され、2007年、大阪大学と統合し大阪大学外国語学部が発足した。大学ホームページ外国語学部沿革http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/outlines/history.html（2014年4月30日最終閲覧）。
13　国語学者、大阪大学名誉教授。京都大学国文科卒、宮地裕は大平学校の設立メンバーの1人である。実際に大平学校に赴任したこともある。
14　中国語出身、後に大阪外国語大学学長になった。
15　大河内康憲、大阪外国語大学教授。
16　高杉英一・阿部武司・菅真城編著『大阪大学の歴史』大阪大学出版会、2009年、192頁。
17　藤堂明保の履歴　1915年三重県に生まれ。東京帝国大学支那哲学支那文学科を1938年卒業後、外務省研究員として北京へ留学。戦後、旧制一高教授をへて、1951年に東京大学専任講師、のち助教授をへて、1964年同大学教授。1970年東京大学を辞任退職、1972年より早稲田大学客員教授、1976年より日中学院長をつとめる。この間1971年より7年間NHK中国語講座を担当。1985年没。文学博士。著書に「漢字語源辞典」（1965，学燈社）、「中国語音韻論」（1957，江南書院。改訂版1980，光生館）、「学研漢和大辞典」（1980，学習研究社）、「漢字の過去と未来」（1962，岩波書店）など多数。藤堂明保・相原茂著『新訂　中国語概論』著者紹介より引用、大修館書店、2005年（第5刷）。
18　学生運動は、昭和30年代においては、日米安保条約反対闘争などをめぐって運動が過激化したが、四十年代になると、政治闘争に加えて大学の管理運営や学費値上げなど学園問題を取り上げ、一般学生を巻き込む形で大学内における紛争が頻発するようになり、44年1月の東京大学安田講堂事件の前後から、大学紛争は全国に拡大し、過激化、長期化した。このころ、欧米諸国においても、ベトナム反戦運動等を契機として、学生運動が多発したが、これらは戦後に生まれ育った学生、大学の大衆化、新左翼の台頭など共通する背景を有しており、我が国の学園紛争もこのような国際的な時代の流れの中にあったと言われている。文部科学省ホームページ　http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318395.htm（2014年4月30日最終閲覧）

19　国語学者、国文学者、国語構文論。1948年、京都大学文学部卒業。1962年、「国語構文論」で文学博士（京都大学）。大阪女子大学助教授、京都大学教養部助教授、教授、1985年退官、名誉教授、上智大学教授、1997年退任。1983年４月～７月、第３期短期講師として大平学校に赴任。

20　早稲田大学語学教育研究所編『木村宗男先生記念論文集』、早稲田大学語学教育研究所、1982年、245頁。

21　オーディオ・リンガル・アプローチ（Audio-Lingual Approach）行動主義心理学および1930年ごろから60年代までのアメリカの構造主義言語学の影響を受けた教授法である。ミシガン大学のフリーズ（C. C. Fries）によって提唱された。この指導法は音声及び会話能力養成を重視した教授法であり、口頭練習が多い。文型などの説明は最小限に止める。木村宗男・阪田雪子・窪田富男・川本喬『日本語教授法』桜楓社、1989年、53～54頁。

22　国際交流基金内部資料「在中国日本語研修センター第２年次報告（要旨）1981年９月１日～1982年７月10日」昭和60年２月22日。

23　水野義道「中国だより４　北京一歳」『言語生活』1981年10月、87頁。

24　水野義道、前掲論文、1981年10月、88頁。

25　兌換券は外貨兌換券のことを指す。外貨の集中管理と外貨のヤミ市場取り締まりを目的として、1980年４月１日から使用。外国人は中国銀行および指定の交換所で外貨を外貨兌換券に換えて買い物をしなければならない。藤堂明保・辻康吾・曽紹徳・堀内克明編『最新中国情報事典』小学館、1980年、744頁。

26　日本人専家の生活待遇について①宿舎（家具、寝具、バスルーム兼トイレ、テレビ、冷蔵庫及び冷暖房設備付き）②出勤、退勤及び生活日常に必要とする交通の手段③中国の医療制度に基づく公費による医療費の給付。神奈川県教育庁管理部教職員課「日本語教自市の派遣・受け入れに関する協議付属書」『中国派遣日本語教師10年の軌跡　1979---1989』神奈川県教育委員会、282～283頁。

27　山口幸二「日本語教育の歴史」玉村文郎編『日本語学を学ぶ人のために』、世界思想社、1992年、301頁。